

27 宇良田唯子とその時代

三 崎 裕 子

ドイツ中央部にあるマールブルク大学は、四六七年の歴史を有するドイツでも伝統のある大学の一つである。医学の分野でもノーベル賞受賞者、エミール・フォン・ペーリングをはじめ多くの著名な医学者が、この大学で研究活動をしていたことが知られている。

このマールブルク大学の創立四五〇年を記念して出版されたインゲボルク・シュナツク著の小冊子、*“450JAHRE PHILIPPS UNIVERSITÄT MARB-URG 1527-1977”*に、一人の日本人女医についての記述がある。それは女子学生と大学との関係を記した箇所、マールブルク大学が正式に女子学生の入学を認めたと一九〇八年を溯ること三年、一九〇五年にマールブルク大学で初めて、二人の女性に博士号が与えられたというので

ある。その一人が法学のアリックス・ヴェステルカンブ女史、そしてもう一人が“eine japanische Ärztin”であった。

ドイツでは、一九世紀後半から大学の医学部への女子学生の入学を求める動きが活発化していたが、女子学生の入学が多くの大学で認められるようになったのは一八九八年であった。またはじめて女性の医学博士が誕生したのは一九〇一年であるから、このマールブルク大学の小冊子に記されている日本人女医の快挙は、マールブルク大学のみならず、ドイツ全体においても特筆される出来事であったと思われる。

この日本人女医の名は、宇良田唯子。一八七三(明治六)年、熊本県天草に生まれ、東京の明治女学校を卒業後、郷里熊本で薬学校を出て薬劑師となった。しかしその後一八九五(明治二八)年には再び上京して済生学舎に学び、一八九九(明治三二)年医術開業試験に合格、医師となった。その後、さらに伝染病研究所で学んだ後、郷里で開業したが、一九〇二(明治三五)年に、また上京してドイツ語を学び、翌一九〇三(明治三六)年にマールブル

ク大学に留学した。

宇良田唯子の専門は眼科であったが、大学では眼科と衛生学研究所に所属していた。学位論文は“Experimentelle Untersuchungen über den Wert des sogenannten Crede'schen Tropfens.”という新生児淋菌性結膜炎の予防法に関するもので、一九〇五（明治三八）年二月に審査され合格となった。実質二年に満たない短期間の留学であったが、宇良田唯子は見事に学位を取得して帰国したのであった。彼女の学位論文審査に関する書類一式は、現在、マールブルク市にあるヘッセン州の文書館（Hessisches Staatsarchiv Marburg）に保管されている。

帰国後、宇良田唯子は東京で眼科医院を開業、そして一九〇九（明治四二）年頃、結婚により中国大陸に渡り、一九三二（昭和七）年に夫の死により帰国するまで、中国で開業し、病院を経営した。しかし帰国後の彼女は医学界においても、また女医界においても特に重要な地位を占めることはなかったようである。日本人女医として初めて医学博士の学位を取得した女性の存在が、当時の社会で、なかんづく医学界、女医界においてもさほど重視

されなかったのは、やはり時代の限界であったのだろうか。宇良田唯子を通して当時の日本の女医の在り方を考えてみたい。